

※クリックすると記事のページを開きます。

|                                                          |    |
|----------------------------------------------------------|----|
| ①オンラインでのカンボジア語教育実践報告 1：カンボジアの朝を味わうオンラインツアーに参加して .....    | 2  |
| ②オンラインでのカンボジア語教育実践報告 2：カンボジア人留学生とともに学ぶカンボジア語 .....       | 4  |
| ③オンラインでのカンボジア語教育実践報告 3：カンボジアの内戦についての講演会 .....            | 6  |
| ④オンラインでのカンボジア語教育実践報告 4：共に学ばーオンラインを通しての日本語学習ー .....       | 7  |
| ⑤オンラインでのカンボジア語教育実践報告 5：伝統芸能のワークショップー大型影絵芝居の語りを体験ー .....  | 9  |
| ⑥オンラインでのカンボジア語教育実践報告 6：伝統芸能の一座へのインタビュー .....             | 12 |
| ⑦オンラインでのカンボジア語教育実践報告 7：アンコールワットへのオンラインツアー .....          | 15 |
| ⑧オンラインでのカンボジア語教育実践報告 8：日本を紹介する（1）名前 .....                | 17 |
| ⑨オンラインでのカンボジア語教育実践報告 9：シエムリアップ市内ツアーを体験 .....             | 19 |
| ⑩オンラインでのカンボジア語教育実践報告 10：伝統芸能のワークショップー小型影絵芝居を体験 .....     | 21 |
| ⑪オンラインでのカンボジア語教育実践報告 11：伝統芸能のワークショップー民話の世界と伝統音楽を体験 ..... | 23 |
| ⑫オンラインでのカンボジア語教育実践報告 12：伝統芸能のワークショップーその炎を絶やさぬようにー .....  | 25 |
| ⑬オンライン短期留学実践報告（2021 年 2 月） .....                         | 28 |

## ①オンラインでのカンボジア語教育実践報告 1：カンボジアの朝を味わうオンラインツアーに参加して

大学の世界展開力強化事業（ASEAN 地域における大学間交流の推進）「日本発信力強化に貢献するミャンマー・ラオス・カンボジア知日人材養成プログラム」の試みとして、東京外国語大学では、専攻言語（カンボジア語）の夏学期集中講義（2020 年 9 月）において、オンラインツアーによるカンボジア語学習の実践を行った。履修者は、予習として、事前にシエムリアップ市内のレストランで録画された朝食風景の動画とスクリプトを見て学習し、質問を考えてから、当日のオンラインツアーを行った。当日は、動画を撮影した会社の事務所から zoom による中継を行い、取材をしたガイドがカンボジア語で質問に答え、解説をした。同時にチャット機能でカンボジア語の解説の一部を表示することで、履修者の理解を助けた。

以下は、参加した履修学生からの報告である。

### カンボジアの朝を味わうオンラインツアーに参加して

国際社会学部カンボジア語科 2 年 野口亜依

2020 年の今、会食が制限されてしまい、私たちは一つのテーブルを一緒に囲むことができない。大学の学食で友人とご飯を食べたり、遠くに住む親戚と集まるのが難しくなってしまった状況の中で、本学では 9 月にカンボジアの朝ごはんを知るオンラインツアーが行われた。事前にカンボジアでガイドを務めるポリンさんに録画してもらった朝食インタビュー動画に対して、日本の学生からポリンさんへ中継で質問させていただくという試みである。

日本では朝ごはんというと家で食べるものというイメージが強いが、カンボジアでは出勤前や一日のスタートとしてお店に朝ごはんを食べに行く人が多い。今回のツアーの舞台もそうした人たちが集まる、食と会話が楽しめるご飯処であった。メニューとして、焼き豚や鶏肉とご飯をあえたもの、米粉でできた麺クイティアウ、魚ときゅうりの酢の物などが店先のショーウィンドウに並べられていて、こちらにまで美味しい香りがしてくるようだ。

キッチンでは、大鍋の中に魚醤や肉の骨、様々な香草を入れてだしを取っているところだったが、料理中にもお客さんの

注文や質問、会計に対応していて、忙しそうに、しかし楽しそうに切り盛りする様子が伺えた。

出勤前の男性客や親子連れがインタビューに答えてくれた。食べ方は人それぞれで、唐辛子の調味料やきゅうりの漬物と一緒に食べる人も見られ、皆「チガニユ（美味しいよ）」と笑って答えてくれた。

当日の中継による質疑応答の時間はあっという間に過ぎていった。実際に行ったらその場の雰囲気や会話に圧倒されて見逃してしまう風景に、オンラインだと細かく目を配ることができたため、私たち学生たちは皆、浮かんできた質問が一つや二つでは済まなかったのだ。「その料理って何？ どうやって作るの？」、「コーヒーにそんなに砂糖入れるのはなぜ？」、「その値段ってカンボジアでは高いの、安いの？」など、きりが無いのだ。

しかしポリンさんは本当に親切で、そうした一つ一つの質問にとっても丁寧に答えてくれた。例えば、先ほど紹介したクイティアウはカンボジアの人たちにとって定番の朝食メニューであり、米粉の麺はモチモチとしていて、肉や野菜と一緒にあっさりとしたスープをかけて食べるのだという。また、カンボジアの人たちは、コーヒーは甘いものが好きで、カップの底には練乳が層となっている。今回インタビューした男性はそこに砂糖を4、5杯加えていて、とても驚かされた。コーヒーは一杯 3000 リエル（およそ 77 円に相当）で、街中では相応の値段なのだという。

地域によっては朝ごはんを家で作るという家庭も多いが、街中ではお店で朝ご飯を食べることは贅沢ではなく、毎日の暮らしの一部となっている。ただし昨今の感染拡大の影響を受けて、観光都市シエムリアプは大きな打撃を受け、お客さんたちも皆仕事が減ってしまったと話していた。このように、料理のことから食文化、そこから見えてくる生活にまで話は広がっていった。

お店の中はまるで家庭のようで、気候や自分の生まれた町のこと、仕事のことなどお客さん同士が店の主人も交えて楽しそうに話している。それがどんなに大切な光景であるのか、今の状況だからこそ気づくことができた。人との会話が、今日も一日頑張ろうと人々を励まし、美味しい料理に付け足すスパイスとなっていることは、オンラインであっても私の心に伝わってきた。彼らが楽しく笑い美味しく食べ、この瞬間を素直に楽しみ、大切にしているように思えた。

今年、私はカンボジアに行くことができなくなってしまったが、今回のツアーを通して、料理や食文化、現在の状況における人々の暮らし、また食事の場を大切にしている様子を知ることができた。こうした日々の暮らしや人々の思いは教科書では体験できない。今回のようなオンラインツアーを通して彼らの声を聞くことで、遠くなってしまった国を再び近くへと感じることもできた。

## ②オンラインでのカンボジア語教育実践報告 2：カンボジア人留学生とともに学ぶカンボジア語

大学の世界展開力強化事業（ASEAN 地域における大学間交流の推進）「日本発信力強化に貢献するミャンマー・ラオス・カンボジア知日人材養成プログラム」では、東京外国語大学で行われる専攻言語（カンボジア語）科目において、王立プノンペン大学（カンボジア）の学生が、授業を補佐している。

2019 年度は、通常の教室で授業を補佐したが、2020 年度は、zoom によるオンラインのクラスとなり、学期によってはカンボジアからの遠隔での授業補佐を行った。zoom のブレイクアウトルームや画面共有の機能を利用して、作文の添削やスピーチの発音矯正を行った。

以下は、2019 年度から 2020 年度に行われたカンボジア語クラスに参加し、留学生による授業補助を受けた履修者の報告である。

### カンボジア人留学生とともに学ぶカンボジア語

佐藤ゆき

#### 2019 年

1 年生のときは、まだカンボジア語の学習経験があまりなく、カンボジア人の先生の話していることを理解するのはかなり難しかった。そのような時、授業補佐の留学生たちがジェスチャーを使ったり、ホワイトボードに単語を書き出したり、少しでも学生が困った表情をしていると席まで駆けつけて優しく聞いて、理解を助けてくれた。文字を覚える時には、一人一人の席を回って文字の書き方、特に書き順や似ている文字との見分け方を教えてくれ、私たちの書いた文字を丁寧に直してくれた。先生よりも留学生たちの方が私たちの年齢に近いので話しやすく、質問もしやすかった。

放課後に先生の研究室を訪ねると、留学生たちが座っていることが多く、私たちがカンボジア語を、留学生たちが日本語を、同じテーブルで勉強する、ということもあった。お互いに教えあってタンデム学習になっていた。お互いに初めて触れる文字なので書き方を教え合ったりするのがとても楽しかった。

授業以外にも、ボート大会や外語祭にも留学生と一緒に参加し交流を深めた。ボート大会は早朝から会場に来て、

私たちのチームを応援してくれ、写真をたくさん撮ってくれた。外語祭の時は、カンボジア料理の試作会に参加し、作り方を教えてくれた。

現在でも帰国した留学生たちとは SNS を通じて時々話している。

## 2020 年

授業補佐の留学生は、オンラインで授業のサポートをしてくれた。具体的には、まず私たちが教材の文章や提出した課題を読み、それを留学生が聞いて、私たちの発音や文法を訂正してくれた。人によって苦手な発音やよく間違える箇所は異なるので、ただ訂正するだけではなく何度も発音して、できるまで教えてくれた。

私の場合は、子音の有気音・無気音の発音の使い分けが難しかったので、単語を一つ一つ取り上げながら練習した。印象深いのは、初期の頃に習う「ありがとう」には無気音が含まれるのだが、私の発音は有気音になってしまっていた。それがきちんと無気音の音で発音になるように何度も一緒に練習した。

カンボジア人の先生の授業では、カンボジア語のみで授業が行われる。さらにオンライン授業では、対面授業に比べると口頭のための説明が多くなる。そのような場合に、留学生がチャット機能を使って単語のスペルや意味を教えてくれた。これはオンライン授業ならではのサポートの一つであると感じた。

また、留学生は、授業で扱われた単語の発音や使い方についてのまとめを、復習用に、授業用メーリングリストに送ってくれた。

授業後は、時間があればそのままオンライン上の交流の時間となり、授業で取り上げられたトピックはもちろんのこと、日々の生活であったことなどを話題にして、私たちと積極的に話してくれた。どこどこに買い物に行って、何を買ったとか、美味しいものを食べたとか些細なことから、大学生の恋愛に対する考え方、日本人の芸能人について、など話が盛り上がるが多かった。このような交流によって私たちは、テキストにある語彙やフレーズだけではなく、相槌や話題の転換の際に用いられる会話表現を楽しく覚えることができた。

留学生がカンボジアに帰国した後の夏学期の授業でも、カンボジアからリモートで授業に参加してくれた。これもオンラインの利点を生かしたサポートだった。

### ③オンラインでのカンボジア語教育実践報告 3：カンボジアの内戦についての講演会

大学の世界展開力強化事業（ASEAN 地域における大学間交流の推進）「日本発信力強化に貢献するミャンマー・ラオス・カンボジア知日人材養成プログラム」では、東京外国語大学で行われる専攻言語（カンボジア語）科目において、王立プノンペン大学（カンボジア）カンボジア文学科のバン・ソバタナ先生をお招きし、zoom による遠隔講演会を行った。

8 名の参加学生は、事前に、カンボジアで内戦が起きた時代の経験をバン・ソバタナ先生自身が語った自伝的エッセイ集をカンボジア語で読んで当日の準備をした。

2020 年 10 月 30 日の講義当日には、まず、内戦で生き別れになった家族について、次に、地方に強制移住させられ労働に従事していた時の具体的なエピソードについて、さらに、極端な共産主義化で密告が奨励されていたことについて、参加者より質問がなされた。続いて、このようなエッセイ集を執筆した動機についても質問があった。

バン・ソバタナ先生からは、内戦中、ポル・ポト時代（1975-1979 年）には、住み慣れたプノンペンから離れた土地で、強制労働を強いられ、家族が命を失った話をうかがった。先生と同じような年齢の子どもたちも、まだ幼くても、子守りをしたり、田んぼで番をしてスズメを追い払ったり、牛を放牧したり、大人が籠を編むための椰子の葉を拾い集めたりするよう命じられていた。そして、10 歳をこえると、用水路を掘っている現場で土を運んだり、田植えの苗を運んだりする重労働を命じられるようになったという。

また、自らの思い出を綴り始めた動機としては、日本の大学でカンボジア語を教えることになったことがきっかけであり、カンボジアの内戦について、とくに、本来楽しい経験をすべき子ども時代が奪われていたことについて、伝えたくなったということが語られた。

以上の質疑応答はすべてカンボジア語で行われた。

ផ្ទះរបស់ខ្ញុំ



ផ្ទះ សុខឡាន

バン・ソバタナ先生のエッセイ集の表紙

## ④オンラインでのカンボジア語教育実践報告 4：共に学ぶ—オンラインを通しての日本語学習—

大学の世界展開力強化事業（ASEAN 地域における大学間交流の推進）「日本発信力強化に貢献するミャンマー・ラオス・カンボジア知日人材養成プログラム」では、東京外国語大学の学術交流協定校である、カンボジア王立プノンペン大学から交換留学生を受け入れている。しかし、2020 年度秋学期は、留学生の来日がかねわず遠隔で授業を履修している。以下は、カンボジア人留学生の日本語学習補助を担当しているチューターからの報告である。

### 共に学ぶ—オンラインを通しての日本語学習—

野口亜依

2020 年秋学期は、本学とカンボジア王立プノンペン大学との間の交換留学が全てオンラインで行われている。私は、カンボジアにいる留学生ソピーさんの日本語学習を、zoom を通してサポートすることとなった。日本はカンボジアより 2 時間の時間差がある。毎週木曜日の朝 8 時から 10 時まで、つまりカンボジア時間では朝 6 時から 8 時まで、日本語の授業で彼女がわからなかったところを私がサポートしていくというものである。ソピーさんは、カンボジア文学科の学生であり、日本語の初学者である。

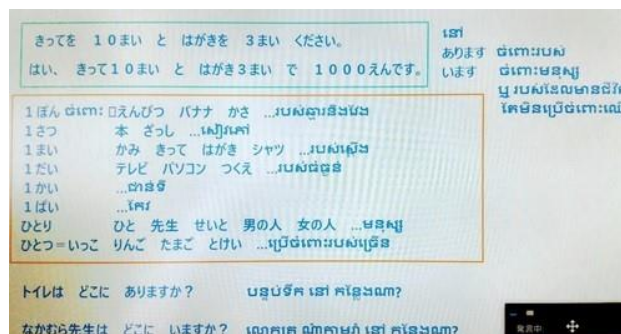
最初のうちはソピーさんが地方の実家にいてネット環境が整わなかったことから、zoom の使い方や履修登録方法など、メールのやりとりをしていた。たった一人でカンボジアから大学の手続きを行うというのは、相当不安だったと思う。その場にいれば書類を見て一緒に手続きしてあげられるのにと、しばしばオンラインの不便さを感じた。しかし後日 zoom でのサポートを始めてみると、文字や写真、動画を一緒に共有できたり、お互いが空いている時間にすぐに繋がれたり、オンラインだからこそその利点も見えてきた。

10 月 8 日、zoom 画面で顔をうつしての初対面。ソピーさんはとても明るくて、こちらのカンボジア語もしっかり聞いて理解しようとしてくれた。日本語や日本の文化にとっても興味があって勉強に前向きなので、こちらも気合が入った。これまではチューターではなかったため、留学生からカンボジア語を教えてもらうことが多かったが、今回は逆に日本語を教えるという立場であるため、あやふやな対応をしてはサポートとはいえない。しかし実際には日本語で聞かれてもわからないような質問にたじたじであった。

例えば、初回のサポートで一番困ったのは、「それ」と「あれ」の違いである。普段では気にせず使っている単語だが、説明するとなると明確に言えない。後から調べてカンボジア語での説明をメールで送ることになった。

もう一つ難しいと感じたのは、脈絡なく不意に聞かれる質問の数々である。日本語の説明をしている途中で、ソピーさんから質問がくるのだが、それに対してすぐに的確に答えることがなかなかできないのだ。カンボジア語のみを使ったサポートであるため、不意に飛んでくる知らない単語やそのスピードについていくのに必死だが、その分こちらも、必死で正しく聞き取り、説明を工夫することで、カンボジア語を勉強させてもらっている。

zoom の画面共有機能を使って、日本語を視覚的に説明することもできた。ホワイトボード機能を使って日本語の文とカンボジア語の訳を並べたり、日本料理の例として写真をいくつか共有するなど、紙に書いて説明するよりも効率的にできている面もある。



zoom の画面上で説明するための自作の日本語学習教材  
(カンボジア語併記)

3 回目、10 月 22 日の授業ではだいぶお互いの会話にも慣れてきて、雑談を交えたりもするようになった。この日は日付と年齢、誕生日の言い方にまだ慣れないということで、日本の休日や行事の日程、お互いの誕生日など、身近な題材を使って日本語を話す練習をした。

ソピーさんが覚えたての日本語を話してみたり、逆に私がカンボジアの文化や歴史についても教えてもらったり、毎回のチャター活動は、お互いに新たな発見に満ちている。ソピーさんが日本語を学ぶことで、自身の力を存分に発揮できるよう、今後もお手伝いしていきたい。



## ⑤オンラインでのカンボジア語教育実践報告 5：伝統芸能のワークショップー大型影絵芝居の語りを体験ー

大学の世界展開力強化事業（ASEAN 地域における大学間交流の推進）「日本発信力強化に貢献するミャンマー・ラオス・カンボジア知日人材養成プログラム」では、東京外国語大学で行われる専攻言語（カンボジア語）科目において、世界無形文化遺産に指定されているカンボジアの大型影絵ティー・チアン一座の座長であるチアン・ソパン先生、語り手であるエー・チャントン先生、人形の遣い手であるクディップ・ソボル先生ほか一座の演者、演奏家の先生方 20 名をお招きし、zoom による遠隔ワークショップを行った。

8 名の参加学生は、事前に、カンボジアの大型影絵の唯一の演目であるリアムケー（カンボジア版のラーマヤナ物語）から、「ポンニヤカーイ、セダーの亡骸に化ける」と「蛇の矢」の 2 章の語りを練習し、当日の準備をした。

2020 年 11 月 10 日のワークショップ当日には、まず、一座の概要について説明を受けた後、実際に参加者の語りにあわせて、音楽の演奏と影絵の演技が行われた。参加者は、自分の語りにあわせて実際に伝統芸能の演技が行われたことに感動していた。

次に、参加者より質問がなされた。伝統芸能である大型影絵芝居の一座とは、国内にいくつあるのか、演じる方々は何歳くらいから稽古を始め、何歳まで演じることができるのか、演者となる条件はあるのか、今日の先生方ご自身は何がきっかけで演者となったのか、どの人形を誰が遣うかはどのように決めているのか、稽古場にあるお供え物は高さによって意味がちがうのか、若い世代にも浸透している芸能なのか、日本の歌舞伎のように現代的なアニメなどをテーマとした演目はあるのか、といった質問が次々となされ、影絵の先生方からは、伝統芸能を守る強い意志が伝わるような回答がなされた。

また、語り手のチャントーン先生からは、今日の参加者の語りについて、zoom でのワークショップは初めて行ったが、遠い日本にいる参加者の語りが予想以上にきれいにきこえたということであった。人形の遣い手であるソボル先生からも、参加者のカンボジア語はとても聞き取りやすかったこと、大型影絵芝居のことばかりでなく供え物にも及ぶいい質問が多かったというメッセージを後日いただいた。

ワークショップ終了時には、実際に公演が終わる際に観客を送り出す音楽の演奏も、今回の参加者のために特別に演奏された。

以上の質疑応答はすべてカンボジア語で行われた。



大型影絵ティー・チアソー座の先生方

参加者のコメントは以下の通りである。語りを通して伝統芸能を体験する感動や、カンボジア語を話すことの喜び、今後の学習への意欲がうかがわれた。

- コロナウイルスの影響で対面でカンボジア語の授業をすることもなければ、留学生との日常会話もできない状況で、自分の発音や会話に自信がなくなっていました。そのため、自分の語りの後にみなさんが演じ始めてくれるのかというのが一番の懸念点でしたが、その懸念を一蹴するように音楽が流れ始め、演技が始まっていったことは、私にカンボジア語を伝えることの喜びを感じさせてくれました。
- この授業を迎えるまでの一週間、自分が担当箇所をちゃんと読めるかどうかの心配ばかりしていましたが、実際にコラボレーションしてみると、とても楽しかったです。次回のコラボは何をするのか楽しみです。
- 自分たちの語りでスバエクトムの劇が進んでいくのが本当に感動ものでした。劇団の方々が気さくに接してくださったおかげで質問をたくさんすることができました。語りを褒めていただけたのもとても嬉しかったです。
- 貴重な方々に私たちの語りに合わせて影絵を披露していただけてとても光栄でした。また、一座の方々も私たちの語りを聞き取れていたようなので、それも嬉しかったです。
- 今回、語り手として再び影絵劇に関わるという、非常に貴重な経験をさせていただきました。
- この授業を受けて、自分が伝統芸能に対して持っていたイメージが覆された。言葉を完全に理解できなくても、伝統芸能が繰り広げる世界観にどんどん引き込まれていった。というのは、自分の語りで作品が進行していくという貴重な体験ができたからである。自分たちの語りによって動き出す音楽が、自分がただ観客として聞く音楽よりも壮大に感じられて、自分でも驚くほどとても感動した。
- 映像上で影絵を見て、今回の授業への準備をしてきました。映像上では一座のみなさんがとても遠いものを感じ

ましたが、生配信という形で見るととても身近で本当に観劇しているようでした。

- 一座の方々が、私のつたない語りに合わせてくださったのはもちろん、最後に美しかったと褒めてくださったのは、自分が団員の方々と時間を共有でき、団員の一員になれたような心地がしてとてもうれしく感じた。
- 今回自分の語りで音楽と動きを披露していただき、オンライン上ではあるものの、音楽の迫力と影絵の繊細な動きに非常に感激しました。また、オンライン授業のため先生以外のカンボジアの方と話す機会が無かったので、自分がカンボジア語で話した内容が劇団の方に伝わっていること自体もとても嬉しかったです。
- 事前に語りの内容やリアムケーについて学んでいたため、影絵の内容をスムーズに理解できたことも今回の上演を楽しめた要因ではないかと思います。今回の体験でカンボジアの伝統文化に触れる楽しさを感じたとともに、その魅力をより深く味わうためにも日々の学習に励んでいこうと思いました。



大型影絵（リアムケー）の演技

## ⑥オンラインでのカンボジア語教育実践報告 6：伝統芸能の一座へのインタビュー

大学の世界展開力強化事業（ASEAN 地域における大学間交流の推進）「日本発信力強化に貢献するミャンマー・ラオス・カンボジア知日人材養成プログラム」では、東京外国語大学で行われる専攻言語（カンボジア語）科目において、世界無形文化遺産に指定されているカンボジアの大型影絵ティー・チアソー座の座長であるチアン・ソパン先生ほか一座の演者、演奏家の先生方 13 名をお招きし、zoom によるインタビュー型ワークショップを行った。以下は、参加学生による報告である。

### 暮らしと伝統芸能―影絵一座の方々に伺う、洪水・コロナの影響と芸術の継承―

野口亜依

2020 年の 11 月 6 日午後、カンボジアのシエムリアップ州の大型影絵芝居の一座、総勢 13 人の先生方に、今年の雨期に起きた洪水、コロナの影響、影絵芝居のお仕事について質問させていただいた。本校からはカンボジア語専攻の学生 12 人が参加した。

カンボジアでは 5 月から 10 月末までが雨期にあたるのだが、今年は雨が多く、全国各地で家々が水に浸り、道路が崩れるという被害が起きた。写真で見せていただいたところ、膝下までつかる程の水が家まで押し寄せている状況が見て取れた。一座の方々も雨の中での外出は出来る限り控えていたという。

驚いたのは、洪水の際には家の前で魚が捕れるということ。洪水やコロナで遠出ができない中、家の前で魚を捕ったりして生活していたという。

ただ、今年の洪水はこれまでの大きな洪水に比べると、まだ被害が小さかったらしく、一か月以上水が引かないこともあったという。



水に浸ってしまった村の様子  
(写真提供：ティー・チアソー座)



大型影絵ティー・チアソー座の劇場の周囲の洪水の状況  
(写真提供：ティー・チアソー座)

水が膝下の高さなら、移動も徒歩かバイクで行うということで、毎年の洪水の対応については、皆さんとても落ち着いている様子だった。

この一座は、スバエク・トムと呼ばれるカンボジア伝統芸能の大型影絵芝居の一座である。牛の皮から手作業で彫った影絵人形は全長 1m を超え、伝統楽器の音楽にのせて、古代インドからカンボジアへ入ってきたお話『リアムケー』の芝居を行っている。

今回質問にこたえてくださった先生方だけでも 13 人はいらしたが、先生方それぞれの役割を担っている。クラスの中で『リアムケー』に登場する悪役の場面を一部見せていただいた。大きな影絵人形を動かすときには、足の踏み込みや手首の細かな動き等、全身を使ってその力強さや繊細さを表現する。人形と木琴や笛との、波長の合ったその場の一体感が画面を通してこちらにも伝わってきた。長い劇の中でそれぞれの動き、テーマとなる音楽はすべて異なっており、その各々を完璧にこなせるよう練習するのだという。

普段はお祭りや伝統行事の際に劇を披露しており、行事の多い 11 月 12 月には月に 20 回以上の公演を行っていたという。

クラスの最後には、座長の先生のお宅で撮影した、炊事風景も見学した。台所には大きなかまど、きれいに下処理された魚や野菜が並び、丁寧かつ素早い包丁さばきが見られた。小魚や野菜をバナナの葉で包んで焼き上げる料理もあり、カンボジアの家庭料理なのだと説明してくださった。そうした普段の暮らしの様子を見ると、一座の方々は皆さん本当に家族のようで、日々の生活と芸術とが深くつながっているのを感じた。

しかしながら、新型コロナウイルスの深刻な影響はこうした芸術の分野にも及んでいる。一座も、予定していた公演はすべて中止になり経済的に厳しくなってしまった。何より、暮らしと芸術が密接につながっただけに、公演の機会がないというのは精神的にも辛かったという。

昨今の状況について尋ねると、最近になってようやく一度公演の機会があり、当日は雨が降りそうだったのだが、線香をたいてお祈りをしたところ無事晴れて劇を決行できたのだそうだ。芝居の事を話しているときの一座の方々は本当に楽しそうで、これからこうした機会が増えていて行ってほしいと前向きに語ってくれた。

日本でも、新型コロナウイルスの影響は芸術の分野に大きく影響を及ぼしており、芸術を楽しむという機会が少なくなってしまった。それでも感染防止に努め、少しずつそうした場所に人が戻りつつある。変わってしまった日常に対して、伝統

芸能を継承していこうとする一座の方々の姿を見ていると、芸術の大切さに改めて気づかされ、その灯を絶やさぬようこの状況を乗り切らなければならないのだと励まされているように感じた。

今回のクラスはすべてカンボジア語で行われたのだが、一座の先生方はとても分かりやすい説明と共に、私たちの拙いカンボジア語も丁寧に聞き取ってくださった。その場で浮かんだ質問をすぐにカンボジア語にするのは、まだまだ難しかったが、このような普段と異なる遠隔授業を通して、カンボジア語の会話力は向上するのだと思う。

今回は、洪水やコロナの近況についてうかがう中で、一座の先生方の芸術と共にある生活や思いまで知ることができた。このような貴重な機会を与えてくださった一座の先生方には心から感謝したい。



## ⑦オンラインでのカンボジア語教育実践報告 7：アンコールワットへのオンラインツアー

大学の世界展開力強化事業（ASEAN 地域における大学間交流の推進）「日本発信力強化に貢献するミャンマー・ラオス・カンボジア知日人材養成プログラム」では、東京外国語大学で行われる専攻言語（カンボジア語）科目において、2020 年 10 月 16 日に、カンボジアのアンコールワット遺跡へ、zoom によるオンラインツアーを行った。以下は、参加学生による報告である。



Covid19 の影響で観光客の姿が見られないアンコールワット遺跡

### 「観光客から見るアンコールワット」との違い

佐藤ゆき

今回のオンラインツアーはアンコールワットのある都市シアムリアブにいるガイドの方と中継を繋ぎ、事前に撮影された動画を見ながら質疑応答に答えていただくという形で行われた。私はカンボジアに行ったことがなく、また当分は新型コロナウイルスの影響で現地に行くことは難しいので今回のツアーは非常に興味深いものだった。

映像はアンコールワットの西参道を通り西塔門をくぐり抜けて第一回廊・第二回廊・第三回廊や境内を巡った。ガイドの方が細かく説明してくれた。

装飾についていえば単に何が描かれているのかを説明するのではなく、ここに描かれるナーガという蛇の絵には人間の世

界と神様の世界をつなぐという意味がある、神々が戦っていることを示す意味があるなど、である。

ヒンドゥー教と仏教の特徴が入り混じる特徴なども細かく教えてくれた。例えば上記にも述べた欄干などに描かれている「ナーガ」という蛇は元々インド神話に出てくるものでヒンドゥー教の特徴の現れである。その一方で境内には多くの仏像があり2つの宗教が混交していることがわかる。

西塔門のところの説明では「いくつか門があってそのうち一つは王家の門で一般の人は別の門をくぐるもの。これはカンボジアの王家ではない一般の人々が端を歩こうとしていたという考えに基づくものだ」ということも教えてもらった。このような情報は自分たちだけで旅行しては気づくことはできなかっただろう。

またガイドの方は私たちの「この壁の装飾にはどのような意味があるか」だとか「観光面で新型コロナウイルスの影響はどのようなものなのか」といった幅広い質問に対して、ただ答えたり、本に書かれているような単純な説明をするだけではなく、そこに住んでいるからこそその説明があった。私はそこから「観光客から見るアンコールワット」と「カンボジアの人々にとってのカンボジア」には一言にはできない違いがあると感じた。

敷地内に子供が座っていたり観光客が通る横で礼拝をしていたりしている。清水寺や東大寺などの観光地かつ宗教的建造物で見えるような光景とは大きく異なると感じた。私はこれがすごく印象的だった。カンボジアと比べると日本では「観光地化」されているところが多いと感じた。日本では日本人である私たちでさえ、たとえば清水寺などは「観光地」という認識の方が強いと感じたが、カンボジアの人々は崇拝対象だとか宗教施設としてみているという印象を持った。さらに自分が礼拝しているところに観光客が通ることをカンボジアの人々は気にしないのかという疑問に対して、ガイドさんは「あまり気にしない」と答えていた。このような現地の人々の考えも意外だった。これは上記に述べたような「現地の人だからこそ」できる案内だと思った。

普通に観光していたら内部の装飾や遺跡巡りばかりに目がいってしまっただけでこのようなことは深く考えられなかったと思う。今回のオンラインツアーだからこそ得られた知見だと感じた。渡航が可能になれば真っ先にカンボジアに行って、アンコールワットを自分の目で見たい。



## ⑧オンラインでのカンボジア語教育実践報告 8：日本を紹介する（1）名前

大学の世界展開力強化事業（ASEAN 地域における大学間交流の推進）「日本発信力強化に貢献するミャンマー・ラオス・カンボジア知日人材養成プログラム」では、東京外国語大学で行われる専攻言語（カンボジア語）科目において、協定校であるカンボジアの王立プノンペン大学の学生を対象に、日本を紹介するプレゼンテーションを行っている。

東京外国語大学側の参加者は、授業のアクティブラーニングとして、zoom を利用して、手描きイラストを見せながら説明を行い、質疑応答を行っている。また、授業の後で、どのように自分の発表が伝わったのかを知るために、王立プノンペン大学側の学生からフィードバックを受けている。

プレゼンテーションの内容は、東京外国語大学側の参加者の学年に応じて、名前や地元の紹介から、日本の教育制度や観光政策までをテーマとしている。以下は、1 年生のクラスによる、「名前に関するプレゼンテーション」の参加学生による報告である。

### 日本人とカンボジア人の名前－日本人学生によるプレゼンテーションから学んだこと－

ニュップ・ソピー

（王立プノンペン大学社会人文学部国文科 3 年）

王立プノンペン大学（RUPP）開催の就活フェアで

誰も自身のアイデンティティとして名前を持ち、言語や国々によって異なります。たとえば日本人とカンボジア人の名前にはどんな共通点や相違点があるのでしょうか。

まず、共通点は 4 点あります。

第 1 は、名前の付け方です。良い言葉や良い意味を持つ名前、好きな著名人や芸能人と同じ名前、美しい響きを持つ名前を選ぶ、ということです。

第 2 は、呼びやすいニックネームをつける、ということです。ほとんどの日本人、カンボジア人がニックネームをもっています。

第 3 は、夫婦に子どもができたとき、父親の姓を使うことが多い、ということです。

第 4 は、苗字・個人名の順番で名前を並べるということです。



相違点は苗字の付け方です。

第1は、カンボジア人は苗字を二つの方法で使います。父親の個人名を苗字とすることもあれば、父方の祖父の個人名を苗字とすることもあります。つまりカンボジア人の苗字は世代によって異なりますが、日本人は一つの姓しか使いません。

第2は、カンボジア人は結婚しても男女とも苗字を変えることはありませんが、日本人は多くの場合、結婚すると、妻が夫の苗字を使用するようになります。ただし、妻が自身の苗字を使用する場合もあります。自身の苗字を途絶えさせないため、自身の苗字が職業上の象徴となっている場合などの理由で、夫が妻の苗字に変えることができます。一方、カンボジア人は、自身の苗字が気に入らなければ、自分の好みで苗字を変えることができます。

(原文カンボジア語 日本語翻訳：カンボジア語専攻1年 森本万由佳)

---

#### 翻訳者コメント

森本万由佳

ソピーさんとは、さらにディスカッションしてみたい。また、それをさらに発展させて、他の国ではどうであるのか、どのような共通点や相違点があるのか調べたい。

今回、私は自分の名前についてのプレゼンテーションをカンボジア語で試みて、日本人であるのに日本について全く知らないことを実感した。日本に住んでいるだけでは何を知っていて、知らないかの区別さえ難しい。あらためて日本を知るうえで、他国のことを知ることが重要であると強く思った。

## ⑨オンラインでのカンボジア語教育実践報告 9：シエムリアップ市内ツアーを体験

大学の世界展開力強化事業（ASEAN 地域における大学間交流の推進）「日本発信力強化に貢献するミャンマー・ラオス・カンボジア知日人材養成プログラム」では、東京外国語大学で行われる専攻言語（カンボジア語）科目において、zoom による遠隔体験を行っている。

2020 年 12 月 8 日には、シエムリアップ市内ツアーとして、市内移動の乗り物の乗り方から、屋外マーケット、遊園地、屋外での舞踊レッスンまでをオンラインで体験した。



屋外マーケットの様子

2020 年 12 月 8 日のワークショップ当日には、動画で、乗り物に乗るまでの交渉、市内の主な建物の紹介、屋外マーケットのさまざまな店の紹介、子どもむけの乗り物のある遊園地、子どもへのインタビュー、夕方に屋外で行われるズンバのレッスンを見学した。

次に、11 名の参加学生、参加者より質問がなされた。日本との違いに着目し、道路状況、乗車料金の決め方、子どもたちが外出する時間帯、健康のための体操について、といった質問が次々となされた。

参加者のコメントは以下の通りである。将来実際に訪れることができるようになるまでに、都市の交通事情、買い物の仕方、地域による人々の生活の違いなど、もっとカンボジアのことを調べて知りたいという意欲が示された。



夕方に屋外で行われるズンバのレッスン

- 周辺の町はアンコールワットより高い建造物を建てることで景観を壊さないように、あえて建てていないのだということとを今回のオンラインツアーで知ることができました。
- ガイドブックには載っておらず、実際にカンボジアに訪れてみないと分からない内容ばかりであったので、とても興味深かった。カンボジアに行ってみたくとさらに強く思った。ツアー内では思いつかなかった疑問点が、反芻して多く出てきた。留学生に聞いてみたり、実際にカンボジアに行ってみて確かめてみたい。
- ナイトマーケットで売られていたものや、ズンバなど、初めて見るものが多く、オンラインではあったがとても充実したコ

ンテンツを見ることができ、カンボジアに実際に行ったような満足感があつた。

- 自分も本当にその場にいるような気持ちになりすごく楽しかった。また、沢山質問もすることができ、カンボジアについての理解が深まり、学習に対してさらに意欲が湧いた。
- まるで実際に現地にいるかのような臨場感のあるツアーだった。ガイドさんが話す内容全て刺激的で面白かった。
- 心に残ったのは、カンボジア人は対話やつながりを重んじる、ということです。例えば、何かを購入する際の値切り行為が一つの重要なコミュニケーション形態として確立していたり、広場に集まって皆でエクササイズをして共に汗を流したり、一般の方が突然の声掛けに快く笑顔で答えてくれたりする、そんな姿が非常に印象的でした。

## ⑩オンラインでのカンボジア語教育実践報告 10：伝統芸能のワークショップー小型影絵芝居を体験

大学の世界展開力強化事業（ASEAN 地域における大学間交流の推進）「日本発信力強化に貢献するミャンマー・ラオス・カンボジア知日人材養成プログラム」では、東京外国語大学で行われる専攻言語（カンボジア語）科目において、世界無形文化遺産に指定されているカンボジアの大型影絵ティー・チアン一座の座長であるチアン・ソパン先生、語り手であるエー・チャントン先生、人形の遣い手であるクディップ・ソボル先生ほか一座の演者、演奏家の先生方 10 名をお招きし、zoom による遠隔ワークショップを行った。

8 名の参加学生は、事前に、今回の演目である民話コンヒアン（勇者コン）を読んでワークショップに臨んだ。

2020 年 12 月 15 日のワークショップでは、民話をもとにした小型影絵芝居が 4 場面にわけて演じられるのを観劇した後、参加者より質問がなされた。前回のワークショップで学んだ大型影絵芝居とどちらが演じるのが難しいか、女性役の声はどのように出しているのか、虎との戦いの音はどのように出しているのか、演者はどのような姿勢で人形を操っているのか、新しい物語を演出する場合に音楽はどのように選んでいるのかといった質問がなされ、それぞれに対して、実演をまじえた丁寧な回答がなされた。以上の質疑応答はすべてカンボジア語で行われた。



小型影絵による民話（勇者コン）の演技

参加者のコメントは以下の通りである。単なる鑑賞に終わらず、質問をすることでより深い理解につながる実感がきている様子であった。

- 1、2 年次の民話の授業のノートを引っ張り出して話を理解した上で見ることであったため、懐かしさもあり楽しかった。この機会に授業で学んだ時には気づかなかった視点で民話を読めて、とてもおもしろかった。
- 演技の全体を通してスパイク・トーイは和やかな雰囲気があると感じました。登場人物の話し方や、音楽に合わせた歌、人形の動かし方など、物語を全て理解できなくてもクスッと笑いたくならないような場面がいくつかあり、とても面白かったです。実際、一座の先生方も「おどけた感じに演じている」とおっしゃっていたので、それを感じることができてよかったです。

- 白い布に人形同士を打ちつけた音が観客まではっきりと聞こえていることに、先生方の長年の技術が現れていると感じた。楽器で打ちつけた音を鳴らしているのかと思う程、とても強く打ちつけているのかと思ったが、先生方の手の動きからは力を入れている様子はあまり見えなかった。手先の細かい動きであのように大きな音を出しているとは、とても驚いた。
- 人形は表情は変わらないが、演者の声の抑揚や激しい動作で、どのような場面なのかが十分理解できて感動した。また、同時に、言語を完全に理解できない人を置いていくことなく物語を展開する技術が素晴らしいと思った。これこそ伝統芸能だと感じた。
- 今回、劇を見終わってから、裏側（演者側）を見ることができたことが大変貴重な体験だった。さらに、質問をしてその場面を再現してもらうというのはスバエク・トーイに対する理解が深まる貴重な機会であったと共に、大変贅沢な時間であった。例えば、ゾウが出てくる場面で、ゾウが単体の時は、勇者コンとゾウにはそれぞれ操る人が1人ずついたが、勇者コンがゾウに乗ってからは1人で操っていることに驚いた。どのように人形を動かしているのか、という質問をしなければわからなかったことであった。また、登場人物が多い場面は、もちろんそれを操っている人も多いと考えられるが、みんなでお尻で少しずつ移動している、ということは想像できなかった。このように、裏側を拝見させていただいたからこそわかったことがたくさんあった。
- スバエク・トーイの人形は、物語に合わせて自分で作っていることを知り技術力に驚かされるほか、劇団の方々の優しい雰囲気に触れカンボジアの劇場で観劇したく感じた。
- 今回のスバエク・トーイの上演をみて、カンボジアの「楽しいときを共有する」文化の魅力を再認識しました。スバエク・トーイは法事など人が集まる場所で演じられることが多いとのことですが、みんなで滑稽な演劇を見て笑いあう、というカンボジアの文化は、家族や友人を大切にするカンボジアらしい素敵な文化だと改めて感じました。



質問に答えて芝居の裏側での移動の様子を実演



## ⑪オンラインでのカンボジア語教育実践報告 11：伝統芸能のワークショップー民話の世界と伝統音楽を体験

大学の世界展開力強化事業（ASEAN 地域における大学間交流の推進）「日本発信力強化に貢献するミャンマー・ラオス・カンボジア知日人材養成プログラム」では、東京外国語大学で行われる専攻言語（カンボジア語）科目において、世界無形文化遺産に指定されているカンボジアの大型影絵ティー・チアソー

座の座長であるチアン・ソパン先生、語り手であるエー・チャントン先生、人形の遣い手であるクディップ・ソポル先生ほか一座の演者、演奏家の先生方 10 名をお招きし、zoom による遠隔ワークショップを行った。

10 名の参加学生は、事前に、今回の演目である民話を原文で読んでからワークショップに臨んだ。

2020 年 12 月 22 日のワークショップでは、民話コンヒアン（勇者コン）をもとにした小型影絵芝居が 4 場面にわけて演じられるのを観劇した後、参加者より質問がなされた。また、両面太鼓の先生の指導のもとに、参加者は各自手元の机をたたきながら、伝統音楽のリズムを実体験した。



先生の実演にあわせて両面太鼓のリズムを体験

参加者のコメントは以下の通りである。日本の伝統芸能と比較したり、舞台の裏側の見学を通して発見をしたり、人形の制作方法や、楽器についての説明を聞いたりする中で、何よりも学んだカンボジア語を活用できた喜びが感じられた。

- ・ 授業で読んだ話を実際に影絵芝居という形で見ることでとても楽しかったです。鑑賞だけでなく、質問にも答えて下さって、ネイティブの先生や留学生以外の人とカンボジア語で話すのは初めてだったので、実際にカンボジア語を聞く、話すという点でもとても貴重な経験でした。
- ・ 初めて先生や留学生以外の方とリアルタイムでカンボジア語を使って質問することができ、自身の学習において素晴らしい経験になった。伝わるか伝わらないか不安であったが、自分もできるだけゆっくりはっきり話すようにしたことであってか、無事に意思疎通を図ることができた。また先生たちの返事もザックリと理解することができ、自分の学習に対して自信になるような良い機会になった。
- ・ 話すときにカンボジア語のリズムに合わせて手を動かして、どのキャラクターの声なのかもと目でわかり、また、臨場感があり、今でも鮮明に思い出すことができるような、頭に残る動きでした。また、語りの声も素晴らしかったです。特に最初の場面に出ていた妻の声が優しく、さらにリズム感があってとても気に入りました。
- ・ セリフ一つ一つに感情がこもっており、緩急がしっかりつけられていたため、登場人物の感情や状況などがわかるようになっていた。
- ・ 影絵の道具はとても緻密にできていましたし、楽器も多様で美しい音色を奏でていたのでその技術の起源が気にな

なりました。

- 人形芝居と音楽の兼ね合いが独特の空間を作り上げているカンボジアの伝統芸能、「スバエク・トーイ」は日本の伝統芸能である人形浄瑠璃と似ている点が多くあったと感じた。
- 日本の伝統芸能で使われる音楽のように、カンボジアの影絵でも使う楽器と場面のイメージとでは法則性があるのか調べてみたいと思った。
- 印象的だったのは、カンボジアの影絵芝居の伝統が開かれた状態にあることです。厳格すぎる掟や伝統的制約などなしに志を持つ人が心からやりがいを感じて守る伝統に、大きな希望を感じました。
- 今回紹介された楽器もとても魅力であった。特に大きい笛や縦笛は、演奏者の方々が息継ぎを見せずにずっと音を出していたのが印象的だった。



質問に答える先生方



## ⑫オンラインでのカンボジア語教育実践報告 12：伝統芸能のワークショップーその炎を絶やさぬようにー

カンボジア語専攻2年 野口亜依

2020年12月18日、カンボジアの影絵芝居の一座、ティー・チアソー座の方々とオンライン中継を繋ぎ、カンボジア伝統の影絵芝居、スバエク・トイを披露して頂いた。東京外国語大学からは学部生11名が参加した。

影絵芝居の演目は「コン・ヒアン」というカンボジア伝統の民話。内容は、主人公コンは臆病者だが、二人の妻にいつも助けてもらって立身出世していくお話で、劇中にはトラやワニと戦ったり、ゾウに乗って戦いに出たり、妻たちと歌って踊る場面が登場した。

スバエク・トイの要として欠かせないものの一つが、精巧に作られた人形の数々である。牛皮をなめして一つ一つ手彫りで作られた人形は、靴の紐から髪の毛の一本一本、洋服の縫い目に至るまで繊細に作られている。人形の種類は人だけでなく、トラ、ワニ、ゾウ、またボートとそれを漕ぐ人や波までも細かく彫られ表現されていた。



主人公がゾウに乗ってワニ退治に向かう場面

繊細に表現されているのは人形そのものだけではなく、その動きもまた然りである。劇中、人形たちは手足を自由に動かし、話すときには同時に口も動いて、まるで生きているかのようであった。後からその繊細な動きについて質問してみると、驚いたことに、一つの人形に対して声も動きも一人で行っているらしい。主な人形には棒が3本付いていて、持ち方を変えて上下に動かすことで歩く動きや戦う様子を表現する。話す動作に関しては、人形の口元にゴムが付いていて、それを人差し指にくくりつけておき、話すと同時に動かすのだそうだ。

また、人形の楽しげに歌ったり、慌てふためく様子は、人形の動きの大小を変化させることで、繊細に、時には大胆に表現される。戦いの場面では、人形同士を激しくぶつけ合うことで、影絵芝居とは思えない臨場感を伝える。今回のワークショップでは、こうした舞台裏まで見学することが出来たおかげで、躍動感ある劇の背景にどれだけの鍛錬と崇高な作業がなされているのかが見て取れた。

このワークショップが行われる前、2020年11月、本学においてオンライン文化祭が開催された。その際、私たちカンボジア語科2年生の総勢10人は、手作り棒人形を使ってカンボジア語劇を撮影、オンライン・コンテンツとして掲載した。

劇の演目には、一座の方々同様カンボジアの民話を選んだのだが、長い本文を劇様式にまとめる作業、地の文をセリフに起こす作業、字幕をコンパクトかつ正確にまとめる作業など、その一つ一つが想像以上に大変で、構想から完成まで2か月以上を要した。劇の撮影時にも、棒人形の動かし方や気持ちのこもった声の吹込みなど、どれだけ気を配っても事足りない。

そうした経験があったことから、今回、一座の方々テンポよく行っていた迫力あるお芝居が、どれほどに地道な構想を経て作られ、幾度とない洗練された表現練習がなされてきたのかが伺えた。一座の方たちは日々、劇の構想を練り、劇中歌も毎日の暮らしの中で口ずさんで作曲するのだという。毎日の暮らしと芸術とが、深く重なり合っているのを感じた。



劇の収録風景

同時に劇を盛り上げてくれたのが音楽である。背景となる音楽は常に生演奏で、縦笛、両面太鼓、ゴング、木琴等、合わせて7種のカンボジア伝統の楽器が演奏される。例えば、竹から作られた吹楽器は、竹でできているとは思えないほどに、高低幅の非常に広い繊細な音を作り出す。口で息継ぎをすることはなく鼻から息を吸って頬に溜めることで、途切れることのない永遠と続く音を奏でられるのだそうだ。また、歌や掛け声も各場面に合わさって、劇中一体の空気感を醸し出す。

ワークショップ後半には、学生たちで劇中の太鼓のリズムを練習した。太鼓担当の方にリズムを教えていただき、ZOOM越しに手元を映して皆で練習。最初は右手か左手か混乱したが、一座の方々常に関心と声かけをしてくださったおかげで、最後には歌や人形と合わせて皆で合奏することができ、自分もこの伝統芸能の一部になれたような気がして非常に楽しかった。

最後には一人ひとり感謝の言葉を述べる事が出来た。ティー・チアソー座の方々には、これまでオープンキャンパスのビデオBGMや前回のワークショップなど、幾度となくお世話になったので、お礼の言葉をカンボジア語で伝えることが出来て本当に良かった。

このようにカンボジアの伝統芸能に触れられる機会はなかなか無い。まして実際にプロの一座の方々から直接お話を聞けるというのは、オンラインだからこそ実現した非常に貴重な経験であった。前回のワークショップでは、芸術分野における新

型ウイルスの大きな影響を実感したが、今回の影絵芝居を見て、改めてその伝統の炎を絶やしてはいけないと感じた。カンボジアの影絵芝居はカンボジアの長い歴史を映し出し、長い伝統と幾度とない鍛錬によって作り出された、社会を照らす光である。諦めることなく、一步步復興に向けて歩みを進めることが、今の私たちには求められる。今回のワークショップでは、カンボジア伝統芸能を深く学ぶとともに、そうした姿勢の大切さも再確認できた。このような機会を与えてくださったティー・チアソー座の方々には、心から感謝申し上げたい。

## ⑬オンライン短期留学実践報告（2021 年 2 月）

2021 年 2 月 8 日（月）から 2 月 12 日（金）まで、大学の世界展開力強化事業「日本発信力強化に貢献するミャンマー・ラオス・カンボジア知日人材養成プログラム」によるオンライン短期留学プログラム（カンボジア）が行われ、16 名の本学学生が参加した。

なお、本プログラムにおける王立プノンペン大学の協力については、本学ウェブサイトをご覧ください。

・[王立プノンペン大学副学長が本学学生に向けてオンライン講演、林学長と懇談](#)

・[Vice President of Royal University of Phnom Penh Gives Online Lecture to TUFS Students and Meets with President Hayashi](#)

今回は、オンラインによるプログラムであるからこそ可能だった試みが多く、履修した学生の学習の向上も見られたことで、まさに次世代型の留学プログラムとして成功したといえる。

### 1 オンラインで可能になったこと

- ・授業内容への集中（不測の出来事による支障がない）。
- ・カンボジア各地の訪問（移動時間がかからない）。
- ・字幕の配信（学生の理解を促すため難解な語彙の綴りや和訳をチャット機能で同時配信できる）。

### 2 プログラムの特徴

- ・下記のプログラムはすべてカンボジア語で行われた。参加者の半数が 1 年生だったため、2 年生とのペアワークを取り入れた。
- ・ユネスコの無形文化遺産に登録されている影絵芝居について、カンボジアで最も古い歴史を持ち知名度の高いティー・チアソー一座との 5 回のワークショップを行った。特に、演目であるラーマーヤナの語りを本学学生が担当し、それに合わせて、一座の方々が大型影絵を動かし、楽団が演奏するという実演は感動的であった。
- ・協定校である王立プノンペン大学の教員による講演や、同卒業生が勤務する中学校での研修を行った。
- ・タンデム学習として、カンボジア語による日本紹介のプレゼンテーションを行った。これまでの 5 年間に本プログラムに参加

した王立プノンペン大学の学生、文化指導をお願いした影絵芝居の一座の先生方に対して、餅やおにぎりなどの日本的な食べ物、日用品、実演を伴った文化紹介を行った。

### 3 学びの成果

- ・カンボジア語で積極的に質問できるようになった。
- ・多様な方々とカンボジア語でコミュニケーションをとることができた。
- ・言語はもちろんのこと、カンボジアの文化、社会、歴史への関心、学習意欲が高まった。

以下に、参加した学生の声を紹介する。

#### <大型影絵のワークショップを体験して>

- ・これは人生において二度と体験することはできないような貴重な機会であるに違いないだろう。また、貴重な体験の中でさらに貴重な韻文の語りを担当することが出来たことは、今後の私のカンボジア語学習における大きなモチベーションとなった。
- ・実際に語りの発表をしてみて自分の声が影絵芝居に重なった瞬間は本当に感動して忘れられない。確かにカンボジア語初心者には語りは難しかったが、挑戦したことにはとても意義があったと感じている。
- ・先生方に丁寧に一節ずつ教えて頂き、意味合いの違いも確認していったことで、徐々に抑揚の機微に気を配れるようになっていった。最後に自分の語りの後に劇が始まった際には、自分も一座の一員になれたようでとても誇らしかった。
- ・一つの作品、一つの伝統に関わることができていることが強く感じられ、感動的だった。芝居に参加している時の、オンラインで繋がっていることを忘れるような芝居への没入感と、その中で感じた影絵芝居の美しさや力強さは忘れられない。
- ・先生方に「日本の音楽を演奏したことはありますか？」と質問をしたところ坂本九さんの『上を向いて歩こう』を演奏していただいたのだが、その音色に非常に繊細で音楽の美しさの万国共通性を感じて非常に感銘を受けた。

#### <日本紹介のプレゼンをして>

- ・カンボジアの方は熱心にメモを取り、相槌を打ちながら聞いてくださった。外国の方が自国の文化に興味関心を持ってくださることはとても嬉しいことだと実感した。

・ここで学んだのは、やはり相槌や質問をもらうともらった側もうれしいということだ。対話を行う際に相手とのコミュニケーションをより良いものにするためのコツもこのオンラインプレゼンから学び、これからの言語学習や社会活動等に活かしていきたいと感じた。

・この3回のプレゼンの中で学んだのは実用的な知識だけではない。何より、言語学習者としての「伝える」「伝えられる」ということの本質をあらためて確認することができた。

#### < 今後の学習について >

・先輩方と私のカンボジア語学習期間は1年間しか変わらないが、その能力の差に驚かされた。それと同時に、自分の1年後が楽しみになった。

・今回のオンライン留学では、カンボジアの伝統文化について学び、その在り方について考える良い機会となった。

・今回のオンラインショートビジットプログラムを通して、カンボジアについて学習するモチベーションを向上させたり、自分のなにかにある価値観に気づいたりすることができた。

・今回で得られた様々な知見を今後のカンボジア学習でも生かし、いつか渡航が可能になれば、実際にカンボジアへも訪れてみたいと思う。

・私たちの拙いカンボジア語にも先生方は丁寧に答えてくださった。このプログラムは言語運用能力向上のモチベーションにもつながったので、引き続きカンボジア語の学習にも力を入れていきたい。

#### < 中学校を見学して >

・今回はオンラインであったからこそ、画面越しに学校の内部の様子を見ることができ、カンボジアの生徒たちの普段の雰囲気も知ることができた。

・実際に中学校の図書館からzoomを繋いで話をお聞きした。ソピア先生の背後では図書館で主体的に勉強に励む生徒たちの様子が窺え、学習が非常に活発であることを感じられた。

・今回のプログラムではカンボジアの教育の新たな一面を知ることができた。

・まさにこれからの時代に求められる「主体的な学び」というものが実現されているのだと感じた。

#### < 講演を聞いて >

・カンボジアは、ポル・ポト時代や内戦、貧困といったイメージを持たれやすいが、その時代を生きてきた人々は今の私たちと同じように、思い出して笑ってしまうような思い出を持っているのだと実感した講演だった。

#### < 遺跡を見学して >

・リアルな旅行をできるようになったら、ぜひプレア・ビヒア寺院に行ってみたいと思う。それまでにカンボジア語の勉強を頑張り、次回はカンボジア語でガイドを聞き取れるようになりたいと思った。